舊の鄯善の地方に關する記事の中で、大なる史趣を感ぜしむるものゝ一つは、石城鎮・新城・蒲桃城・薩毗城等が皆貞觀中に康國人卽ちソグド人の大首領康艶典によりて修築せられ、その國人がこれ等の城鎮に住んで居つたことを知り得られることである。既にペリオ氏⑱も注意した通りに、賈耽の道里記中前に引用したところにも、石城鎮に康豔典が鎭使たりしこと及び新城卽ち弩支城が康豔典によりて築かれたことは見えて居るけれども、他の二城卽ち蒲桃城や薩毗城には及ばず、またそれが何時の事であつたかも明らかにせられてゐなかつたものである。隋が亂れて後、統制の及ばなかつた時に當つて、かくソグド人の植民地が此の地方に經營せられ、而して沙州都督府圖經⑲に見えるやうに、武后の天授二年（691 A. D.）に於てもなほ同國人の拂菻延が鎭將としてこゝに在つたことを知り得るのは、甚だ注意すべきことである。

三、伊州の條下、第36—37行に「貞觀四年首領石萬年率七城來降」とあるのは注意に値する記事である。隋の伊吾郡が隋の亂れた後胡に沒したことは、元和郡縣志にも舊唐書地理志にもそれぞれ伊州の條に記され、前者には「隋亂、又爲群胡居焉」、後者には「隋末西域雜胡據之」と見え、またそれが唐に來附したことについても、前者に「貞觀四年胡等慕化內附、於其地置伊州」後者に「貞觀四年歸化、置西伊州」と見えるけれども、首領石萬年の名はどの書物にも記されてゐない。冊府元龜卷九九九には貞觀「四年九月伊吾城主來朝」と記し、通鑑唐紀九にはこの年「九月戊辰伊吾城主入朝、隋末伊吾內屬、置伊吾郡、隋亂、臣於突厥、頡利旣滅、擧其屬七城來降、因以其地置西伊州」と最も詳密な記事を載せて居るけれども、なほその城主の名に及んでゐない。今この殘卷の記する所

唐光啓元年書寫沙州・伊州地志殘卷に就いて